



## ヨーロッパ音楽史の系統を 鮮明に理解する

本書の特徴は、①作曲上の特徴を根拠とした著者の見解による歴史区分と各時代の音楽について、「なぜ」「どのような」経緯で「どのように」なったのかという背景や、「何が」「どのように」違うのかという特徴まで詳しく述べられていること、②古代ギリシアから1980年代までの音楽や時代背景、地域の特徴や楽器の発展にまで言及した通史であり、特に古楽、教会音楽の内容が厚いこと、そして何より③内容のボリュームに反して言葉の表現が豊かかつ分かりやすく、専門家から一般読者まで興味深く読み進められることです。

### 音楽の温故知新

特に著者の専門分野であるキリスト教音楽については、なぜ口伝で伝わる聖歌の旋律を書き留めるようになったのか、既存の聖歌をどのように改良していったのか、どんな価値を求めていったのか、なぜ新しい聖歌が必要になったのかなど、以上は中世音楽の章で詳しく述べられていますが、単純な音楽がどのような経緯で複雑化していったのか、その過程をすっきりと理解することができません。発展の軌跡をたどると、創作活動において、どんな段階を踏んでより複雑な活動に発展させていくとよいかなど、教材研究の手掛かりになりそうな内容がたくさんあります。ルネサンス音楽まで時代を進める



### ヨーロッパ音楽の歴史

金澤正剛 著  
四六判・280ページ  
定価(本体2700円+税)  
音楽之友社

と、宗教改革以後の、音楽に対するそれぞれの教会の態度の差異が述べられています。ここでも、教会音楽にどんな価値を求めていたかが焦点となっており、音楽に求める価値によって編成が変わったり、扱う種類(斉唱かコラルか)が変わったりしています。しかし、本書で紹介される教会のどちらも「会衆全員が歌うこと」に重きを置いているのは同じで、このことから一堂に会して歌うことの意義や意味を改めて考えさせられます(早くみんなで思いっきり歌える日常が戻ってきてほしいものです)。

あとがきの前には、ヨーロッパ音楽史の通史、歴史の流れをつくり出したものを「音律」と推論した著者の見解が述べられています。近い未

来に均整美の時代が来るのでは、という締めくくりにはどこか説得力があり、歴史を学ぶことで未来を考える、まさに温故知新です。

### 授業との関わり

学習指導要領と音楽史との関わりは中学校から言及されています。「音楽的な見方・考え方」の解説に「自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連づけること」とあり、また第2学年及び第3学年の(1)「知識及び技能」の習得に関する目標では、「曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに～」と示されています。高等学校では、前述の「背景」が「文化的・歴史的背景」となり、より具体的な踏み込みが求められています。

例えば、ベートーヴェン作曲「交響曲第5番『運命』」の鑑賞を含んだ題材構想を立てる際に、ベートーヴェンの歴史的位置に加え、古典派音楽とロマン派音楽がそれぞれ目指したとされるよさや美しさを教師が理解していると、より「深い学び」に近づけるのではないのでしょうか。題材目標の設定や他の教材との関連、指導事項の精選に加え、先人の思いに倣って生徒の反応を予想するのにも一役買いそうです。

実際の授業では、どの生徒の気付きを膨らませて授業を展開していくか、生徒の発言に対してどのように切り返していくか、などのふとした一言に系統性が生まれます。それが積み重なっていくことで音楽的な見方・考え方が鍛えられ感性がより豊かになっていくでしょう。

「音楽」は小学校から高等学校の「音楽Ⅲ」まで教科名が統一されています。音楽科教育のゴールを見据えて、早期からヨーロッパ音楽の歴史のエッセンスを意識的に盛り込んだ授業を積み重ねていくことで、大きな成果をあげることは間違いありません。

静岡県磐田市立向笠小学校教諭  
寺田 茜